
花言葉を決める少女

工藤 円

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

花言葉を決める少女

【Nコード】

N5416G

【作者名】

工藤 円

【あらすじ】

ふとしたきっかけで特別な力を入れた吉村美女は、その夢のような力にご満悦。何でもできるし何をしても許される。まさしくバラ色の人生を歩み始めたと思ったら……。

起動（前書き）

春・花言葉小説企画用の作品です。こういった小説企画は初参加で戸惑いながら書きました。

今回の企画用に何か話を、と考えた末に出来たのがこの話なんです
が、何故かファンタジー要素も入ってきたり。色々と初めての経験
が重なったこの作品ですが、頑張ってますので是非優しい目
で見守ってやって下さい。

起動

—— 凄く、不思議な夢を見た。

不思議というのは内容のことではなく、とても現実味のある夢だったということ。内容自体はまあ、陳腐で出来の悪い作り話という感じ。

まず、夢の中で私は一輪の花を摘むんだ。それは何でも良くて、とにかく身近な花を一輪。私は半ば眠っている頭で、部屋に飾つてある花瓶の中からカーネーションを一輪取り出した。この時、部屋に手ごろな花が無ければわざわざ外に出てまで夢の内容を辿ってみようとは思わなかったかもしれない。

花を摘んだら、ボールペンで花の葉を潰す。潰すというか、練り込むというか、とにかくそうするとボールペンのインクに葉の汁のようなものが混ざり、これで下準備が完成する。

（あれ？ この後どうするんだっけ）

ギシッ、と椅子の背もたれに体重をかけ、天井を仰いだ。

（ああ、そうだ）

思い出すきっかけになったのは、リビングから聞こえてくるニュースの春の花言葉特集だったんだけど、まあそんな事はどうでも良くて。私は学校カバンの中からノートを一冊取り出すと、まだ何も書かれていないページを開いた。

私が、例えばこのボールペンで白紙のノートに『跳躍』って書く。そして、例えばお母さんに「ねえねえ、カーネーションの花言葉って知ってる？」って聞くとする。お母さんが花言葉博士だなんてへんちくりんな設定がある訳でもなく、お母さんは答えられない。

お母さんは、カンガルーでもないのにその場で大きくジャンプした。

高校三年生の夏、これが私にふと与えられたチカラ。

まさか、本当にその通りになるなんて私自身思ってた。お腹の肉が揺れるくらいに大きく飛び上がるお母さんの姿が少し間抜けに見えて、私は思わず笑ってしまった。

「ちょ、ちよつと美木！ 今の何！？」

ドスン、と音を立てて床に着地したお母さんは、顔を真っ青にして私に聞いた。

「い、いや、私は何も……」

言いかけて、私はダッシュで部屋に戻った。

一分と間を置かず、今度は自分の部屋から顔だけ出して、お母さんに向かって大声で叫んだ。

「お母さん！ バラの花言葉って知ってるー！？」

「えー？ だから母さんは花言葉なんか詳しくないってば」とすると――。

「美木。おはよう」

お母さんは真顔でそう言った。

「……………」

私は、何も言わずに部屋の扉を閉めると、勉強机に飛びついた。机の上で開かれた、『挨拶』と書かれたノートのページ。

（ま、正夢！？）

いや、そういうことじゃなく。

（夢じゃない！ 夢じゃないんだ！！）

花Aの葉の汁を塗りこんだボールペンで動作を書く。すると、「花Aの花言葉は？」の質問に答えられなかった人がその通りの行動をとる。

まるで、夢のような能力。事実、夢で見ただけの話だったのに、その夢は夢じゃなくて。いや、夢なんだけど、夢のような現実で。私の頭は、かつてない程の興奮で混乱していた。

（でも、これ、間違いなく現実だ。ホントのことだ）
手が震える。頬が痺れる。そしてそれは遂に弾け、私は飛び上がった。

「やつぽー!!」

お腹の底から本気で叫んだ。空中で両腕両足を一杯に伸ばし、体中で喜びを表現した。

（なんでもできる！ なんでもやれる！）

ドタンと両足で着地すると、ノートの横のバラを口に咥えてポーズを決めた。

「まさにバラ色の人生ね♪」

なんて、軽快なジョークも飛び出しちゃったり。

すばらしき能力

「美木ー！ 早く朝ごはん食べなさい。学校遅れるわよ」

扉の向こうからお母さんの声が聞こえる。

「は、はい！」

私は慌ててノートを閉じると、バラを花瓶に戻して部屋を出た。

「……………」

お母さんは、まだ先ほどの不可解な出来事を疑問に思っていた。当たり前だけど。ただ、その疑問は「どうして体が勝手に飛び上がったのか」ではなく「どうして突然飛ばうと思ったのか」となっているようで、それは幸運だった。突然体が飛び上がるなんて、一生をその謎の解明に使っても損しないくらいの大問題だ。

「あら。チャンネル変えるの？」

ニユースの春の花言葉特集が私には退屈で、他の番組に変えようとしたらお母さんに突っ込まれた。二回も花言葉を尋ねたんだから当然か。きつと、私は物凄く花言葉に興味のある娘だと思われるんだろう。

「いーのいーの。別に興味ないし」

そう言って、私はチャンネルを変えた。

「変な子。それより急ぎなさいよ。もうこんな時間なんだから」

現在、8時20分。

「あーっ！！」

私は大声を張り上げた。

「やっぱ！ 遅刻しちゃう」

私はスクランブルエッグを口の中にかきこんで、走って部屋に戻った。大慌てで制服に着替え、カバンを手に取り、部屋を出る。

ガチャン。

「いってきまーす！」

ボタン。

ガシャガシャガシャ、自転車のカゴの中でカバンが転がりまわる。私は、短めのスカートにもお構いなしに自転車に立って漕いだ。

（さすがに間に合わないかあ）

8時30分。いつも30分以上かけて登校しているところを急に10分にしろって言われたって、そいつは無理な相談だ。

（あーあ。また原西に怒られちゃうなあ）

——ふと。私は自転車に急ブレーキをかけると、電信柱の根元のそれに目を向けた。

「コラア！ また遅刻か吉村！」

教室に入ると、さっそく原西の罵声が飛んできた。コイツ、いつも私を目の敵にしゃがるんだ。

（……でも、へーんだ）

私は黙って原西の傍に近寄ると、他の生徒には聞こえないように囁いた。

「先生。タンポポの花言葉って知ってます？」

「あ？ そんなの別に——」

答えられるワケないじゃん。私は内心ほくそえんだ。

「あー。ま、今日のところは許しといてやる。さっさと席つけ」

『鬼畜』、原西琢哉の想定外の発言に教室内がざわめく。

「イエイ」

私は、驚く皆に向かって両手でピースした。

——その後も、私はこの不思議な能力を自由に使った。原西に掃除当番を代わってもらったり、授業中の居眠りをスルーさせたり、期末テストを一週間延期させたり。もう、何でもできる。そう考えると信じられないくらい世界が明るくなっていった。

聖地

ある日の放課後、私は教室の掃除を終えると共に学校を飛び出し、眩い夏の日差しの中を自転車で疾走した。

私には、岸村祥太郎という幼なじみがいる。超がつく程の野球バカで、地元でも野球の強い名門校に通っている。

ガシャガシャガシャ、キキーツ。私は、とある病院の駐輪場に自転車を停めると、走って病院の中へと駆け込んだ。

「おばあちゃん！ おめでとう！！」

「……あら、美木ちゃん」

祥太郎のおばあちゃん。体の調子が思わしくなく数年前から入院している。でも、お母さん達はそんな和らげた言い方でいつも私を煙に巻くけど、意識もハッキリしている人がこんなに長く入院しているなんて、つまりはそういう事なんだろうと思う。昔からおばあちゃんに遊んでもらっていた私にくらい、どんな病気が教えてくれても良いじゃんって気はするけど、きつとそういうものなんだろう。

「あらあら。わざわざお祝いに来てくれたの？」

「うん」

おばあちゃんが全快した——って話なら良いんだけど、それなら退院してる。

「甲子園出場、おめでとう」

祥太郎が四番を務めるチームは、今年甲子園出場を決めた。三年目にしてようやくの祈願達成だと祥太郎のお父さんや町の人々は大騒ぎしている。私には、その凄さというものがいまいちピンとこないけど、とりあえず凄いつていうことぐらいはボンヤリと理解してる。

「ようやく、おばあちゃんの夢が叶うかもね」

私は笑ってそう言った。

「そうだと良いけど」

おばあちゃんも優しく笑った。

——祥太郎が甲子園で優勝する姿を見るのが夢。祥太郎が野球の強い高校に入ってから、いや、きつとその前から、おばあちゃんはそう言っている。

「でも、簡単な話じゃないからねえ」

おばあちゃんはそう言って苦笑した。おばあちゃんは昔から甲子園にやけに詳しい。去年も一昨年も、毎年この時期は病室のテレビで甲子園に釘付けになっている。だから、きつと高校時代は野球部のマネージャーをやっていたんだろうと私は勝手に推理してるけど、なんとなく確かめる気にはならない。

（今年ぐらい、球場で試合を見たら良いのにな……）

でも、それはきつと難しいんだ。おばあちゃんの弱っていく姿を見ていて私はそう思う。

（！）

閃きが頭の中を照らす。

「そーだ！ 大丈夫、大丈夫だよ！」

私は立ち上がり、病室という事を忘れ少し大きめに声を張り上げた。

「ど、どうしたの？ 突然」

「うっん、何でもない！」

私は顔の前で両手を振った。

「それより、今年の祥太郎には期待しててね。きつと大活躍するから！」

それを聞いて、おばあちゃんはまた笑った。

——自転車を漕ぎながら、思わず笑みがこぼれる。私は、ちよつと遠出になるけど祥太郎の通う清陵高校を目指した。

「……ここか」

息は切れ、汗が頬を伝いながら、私は清陵高校に辿り着いた。

「うわー、やっぱり凄いな。立派なグラウンド。ウチのオンボロ高校とは大違いだよ」

もう七時を回っているのに、野球部は練習をやめる気配は無い。

（ウチの連中なんてもうとつくに練習終わってるよ。やっぱり違うなあ。……当たり前か）

フェンスの外にいるのに、熱気が伝わってくる。とても「祥太郎」なんて声を掛けられる雰囲気じゃない。

（……しょうがない。待つか……）

私はフェンスに寄りかかった。

足を交差させたり、小石を蹴ったり、金網のほつれをいじったり。流石に、ポロシャツ一枚じゃそろそろ寒い。膝を抱える様にしゃがみ込み、顔を膝にうずめた。

「おい。美木」

……誰かが私を呼んでいる。

「おい」

フェンスの後ろから私を呼ぶ声。私は後ろを振り返った。

「祥太郎！」

「お、やっぱり美木だった。何やってんだこんなところで」

どうやら、いつの間にか眠ってしまっていたらしい。もう真っ暗だ。

「久しぶり。ちょっとだけ時間取れる？」

祥太郎は少し訝しげな顔をした。

「ま、別に良いけど」

む。なんか偉そうにしゃがって。

「祥太郎、私スゴイ力を手に入れたのよ」

私はフェンス越しに話を始めた。

「あ？ いきなり何言ってるんだお前」

「フフン、まあ説明するより実際に見た方が分かりやすいよね」
「？」

祥太郎は少し憐れみすら含んだ目で私を見ている。

「祥太郎。バラの花言葉って知ってる？」

祥太郎は、あまりに想定外の質問だったのか一瞬私が何の事を言っているのか分かっていないようだったが、まあ少しでも落ち着けば質問自体はこれ以上ない程に単純で。

「知ってるわけねーだろ。なんだお前」

「こんばんは」

祥太郎は、私に向かって丁寧にうなづいた。

一瞬、空気が固まった後、我に返ったように頭を上げる。

「うわっ！　なんだ今の！？」

「ふふ、これが凄い力よ。簡単に言うとな、さっきみたいな質問に答えられなかった人が予め私が決めておいた行動をとるの。一つの花ごとに一つの行動」

質問を聞きながら、祥太郎の顔色が変わる。

「さっきは、私がバラの花には『挨拶』を設定しておいたから質問に答えられなかった祥太郎が突然私に挨拶したわけ。ね？　凄いでしょ？」

私は自信満々に親指を立てた。

「す、すげーっ！　なんだこれ！　まじすげーじゃん！」

祥太郎はまるで子供の様にはしゃぎだした。フェンスを掴み顔を近づける。

「何でもできるの？」

「何でもできます。常識的に考えて無理って事は無理だけど」

「うっわ、マジびっくりした。普通に信じられねー」

祥太郎はすっかりテンションが上がりきってしまった。私はそれが嬉しくて。

「それで、私ね、今でも時々祥太郎のおばあちゃんのお見舞に行ってるんだけど、やっぱりおばあちゃんの夢は祥太郎が甲子園で優勝する姿を見る事なの」

私は、カバンを開いてノートを取り出そうとしていた。だから、この瞬間だけ祥太郎の顔から目を逸らしていたけど、当然の様に笑っていると思ってた。

「美木」

「だから、私が二人の夢を叶えてあげようと思って、『優勝』とかって書けばきつと祥太郎は甲子園で優——」

「美木！」

私は、思わず体を震わせた。

「あー……、そういう話かよ。聞いて損した」

祥太郎の表情は、信じられないくらいに冷めていて、それが私には信じられなかった。

「言つとくけど、そんな事死んでもするなよ。そんなんしてもらつて優勝したって嬉しくもなんともねーよ」

祥太郎は淡々とした口調で続けた。

「は……はあ!？」

私は、思わず語調が強くなるのを自分で感じていた。

「なに言つてんの!？　ずっと甲子園で優勝したかつたんでしょ！

？　おばあちゃんだって、ずっと応援してくれてたんじゃん！　それに応えようとかって気持ちは無いわけ!？」

その瞬間、祥太郎の目は怖いぐらいに私を睨みつけた。

「お前には分かんねえよ」

祥太郎はそう言うその後ろを振り返り、グラウンドの奥へと歩いていった。

「な……、なんだよそれ!」

ガシャン！　私はフェンスを叩き、揺らした。唇が震え、否が応にも口調が強くなる。

「待てよ、祥太郎!!」

それでも祥太郎は、二度とこちらを振り返りはしなかった。

「な、なんだよ……」

意味が分からない。せつかく、夢を叶えてあげようと思ったのに。

「バカア!!」

小さくなってゆく背中に向かって、私は思いっきり叫んだ。

齒車

（なんだあんな奴。もう頼まれたって優勝させてやるもんか）

ボチャン、私は湯船の中に顔を沈めた。

清陵高校まで行って帰ってきて、足が張っているように感じる。

明日は筋肉痛かもしれない。

（でも……、おばあちゃんの夢は叶えてあげたいなあ。祥太郎の奴、自力で優勝できるってのかよ）

湯船の中から両足だけ出し、バシバシと水を叩いた。

「コラ！ お父さんが帰ってきたからさっさと出ちやいなさい」

お母さんが、お風呂場の扉を開けて言った。

私はお湯の中から顔を出し、お母さんの顔をじつと見つめた。

「な、何よ」

「……お母さん、タンポポの花言葉って知ってる？」

タンポポは、『許容』。原西に対してしゅっちゅう使ってる言葉だ。遅刻も居眠りも何でも許してくれる。

「ああ、それなら分かるわよ。タンポポはあんたの誕生花だからね」

「えっ！？」

私は思わず湯船から体を起こした。

「えー……と、確か『飾り気のなさ』とかだったかしら。あんたが生まれた時にお父さんと二人で調べたのよ」

（……ウン）

「それより、さっさと出なさいよ。お父さん待ってるからね」

お母さんは、そう言うとお風呂場の扉を閉めた。

（んー、まさかこんな事があり得るとは）

私はタオルで頭を拭きながら、牛乳ビンを口元に運んだ。

（これからはその人の誕生花なんかも気をつけなきゃ。少なくとも、しゅっちゅうこの力を使う相手の分くらいは）

……それから少しして分かった事だが、どうやら一度正解を言われた相手に同じ言葉は使えないらしい。つまり、お母さんに対して二度とタンポポを使えないのは当然だが、例えばコスモスとかで『許容』を使おうとしても、それはお母さんには通用しない。そっくり同じ言葉でなくても、それに準じる意味の言葉も同様に。

（と、言う事は……。ええー！？ 私もうお母さんには『許容』を使えないの！？）

私は自分のベッドの上で飛び上がった。

「ウソウソウソ！ せつかくこんな凄い力があるのにこれじゃ意味ないじゃーん！！」

私は悔しさを堪えきれずに地団駄をふんだ。

許容は、恐らくこれからも最も高い頻度で使うはずだったベストオブ花言葉だったのに。

（くそ、私の誕生花がタンポポでさえなければー！）

いや、それより遅刻しそうになったあの日、たまたま見つけた花がタンポポ以外の花だったら良かったのに。そうすれば、許容を他の花で使えてたんだ。

（いや、いやいやそれより、タンポポの花言葉がもっとバカみたいに長くて難しくて絶対覚えてられないようなのだったら良かったんだ！ 飾り気のなさってなんだよ！ そんなの簡単すぎるよ！）

この悔しさは暫く収まりそうにない。

私がそんな事に頭を悩ませている頃、清陵高校は甲子園大会の一回戦を順調に突破していた。

払拭

「準決勝！？ 祥太郎、もうそんなに勝ち進んでるの！？」

私は思わず声を上げた。

「ええ。あんた祥太郎君の試合見てないの？ 大活躍よ」

お母さんは夕飯の準備をしながら言った。

（準決勝……。ってことは、あと二試合……）

どうしよう。もし、祥太郎が一回戦や二回戦で負けるようなら、その時はきっぱり諦めようと思ってた。優勝なんて夢のまた夢だったんだって。でももし、あと一歩で優勝ってところまで進んだら……。そこまで進んで負けるなんて、絶対いやだよ。

「準決勝、いつ？」

「明日。あんたも祥太郎君の試合ぐらい見なさいよ。幼なじみが甲子園で活躍してるなんて、見逃しちやもったくないわよ」

「う、うん……」

私は曖昧な返事を返した。

翌日、家族は午前中から大はしゃぎだった。どうやら甲子園っていうのは本当に凄いものらしい。他のスポーツも全国大会となるとこんなものなのだろうか。

「あ、美木！ やっと起きてきた。ほら、試合良いところよ！」

「……別に観たくないもん」

私はぶすつとした態度で言い返すと、冷蔵庫から牛乳ビンを取り出した。

「まーたそんな事言っで。あんた祥太郎君とケンカでもしたの？」

「……………」

私は、無言で牛乳を飲み干した。

テレビから聞こえてくる大歓声が、祥太郎を遠い世界へと連れていってしまうようだった。

「……シャワー浴びてくるから」

私は小さく呟いて、ひっそりとお風呂場へと向かった。

（なんだよ。何が甲子園だ。みんな夢中になっちゃって。つまんないの）

自分のおばちゃんより優先するものがあるなんて絶対におかしい。「自力」か「そうじゃないか」なんて、二の次でしょ。

「うがーっ！」

私は、もやもやした心を吹き飛ばすように両手でガムシヤラにシャンプーした。すると少し気が晴れたように思えたが、それはやっぱり気のせいで。熱めのシャワーでシャンプーを洗い流すと、また心は沈んだ。

（……優勝、して欲しいな……）

お風呂場から出ると、元々騒がしかった居間は更に一層やかましくなっていた。これは尋常な話ではない。私はバスタオルで適当に体を拭くとＴシャツとハーフパンツを履き、慌てて居間に走った。

「祥太郎くんー！！　お願い打って！！」

「！！」

私はその声に気付き、テレビに目を向けた。

『さあ、神奈川清陵高校と岐阜陸橋商業の準決勝。場面は大詰め、九回裏ツーアウトを迎えております』

テレビの中の歓声と家族のそれとが混ざり合い、一つになる。

『陸橋のエース、辻川はここを抑えれば決勝進出ですが、逆に打たれれば清陵が決勝進出を決めます！　一点差、ツーアウトランナーは二三塁！　バッターは四番岸村！！』

——その分かりやすい実況で、野球の事を知らない私にも現状を

ほぼ把握する事ができた。要するに、祥太郎が打てば勝つし、打てなければ負けるということらしい。

『ピッチャー第一球！ 投げた！』

実況の人がストライクと言っている。確か、ストライクが三つで三振になると聞いたことがある。

『いやー、辻川はまだ球に力がありますね』

とりあえず、敵の選手を褒めているという事は分かる。気分はあまり良くない。

『さあ、辻川セットポジションから第二球』

「！」

思わず体が跳ね上がった。

祥太郎はバットを振り、バットはボールを打ち、ボールはファウルゾーンというところへ跳ねていった。

『岸村は辻川のボールについていけてますね』

『ええ。今は少し差し込まれたかという感じでしたが、芯に当たれば飛んでいくと思いますよ』

——テレビの中の人が、祥太郎の話をしてる。

カメラはスタンドの応援席を映し、そこでは誰もが声を張り上げて応援している。

『さあ、これがラストボールになるのか！ 辻川はセットポジションから第三球！』

——少しだけ、甲子園というものの凄さが分かった気がする。

ブツツ……、ザー。

突然、テレビの画面は荒れ、音声も映像も途切れてしまった。

「きゃーっ！ まさかこんな時に……！」

お母さんは大慌てで立ち上がり、テレビを叩いたり蹴ったりしてショック療法を試みる。

「もう！ だから早くテレビ買い替えなって言ったのに……！ 早く直してよ……！」

お母さんはバンバンとテレビを叩く。

早く。早く。早く……。私は手に汗を握って祈るようにその様子を見ていた。

『ザー……けた……。……よな……。』

砂嵐が依然テレビの画面を荒らし続ける中、音声だけが少しずつ戻ってくる。

「ちよつと、何て言ってるの!? 祥太郎、打ったの!？」

私はお母さんにしがみつき、隠れるようにしながらテレビの画面を見つめた。

『打ったー! 抜けたー!! 四番岸村の打球は左中間へ! サヨナラッ!ー!』

言っている事は、あまり分からなかった。でも、お母さん達の喜びようとテレビ画面いっぱいに映った祥太郎の表情を見て、結果だけが私に伝わる。

私は、暫く体を動かすことができずに、鳥肌すら立っていると自分で気がつくのはそれから少ししてからだった。

甲子園のヒーローは1人だけ

祥太郎は、甲子園の決勝戦に進んだ。当日、お母さん達は朝から出掛けていったけど、私は別行動で一人甲子園球場へと向かうことにした。

「おっ、美木ちゃん！ 甲子園見てるかい？」

「凄いわね、祥太郎くん！」

町を歩くと、どこでも祥太郎の話ばかり。私は、幼なじみとして少し誇らしくもあつたけど、これだけの騒ぎになつてゐるのに今まで祥太郎の凄さを分かつていなかった自分の愚かさが恨めしかった。

「……祥太郎、勝てるの良いなあ……」

駅へと向かう道のりで、私は他人事のように呟いた。

「いよいよ決勝だな、祥太郎」

甲子園へと向かう清陵高校のバスの中。エースピッチャーの上村は祥太郎に声を掛けた。

「ああ……」

祥太郎は、珍しく緊張感を露にした。

「おいおい、大丈夫だって。お前がいつもどーり打ってくれりゃ勝てるさ」

上村はそう言つて笑つた。

祥太郎は、やれやれといった表情でため息をついて、「そうなつて欲しいけどな」と呟いた。

「不安か？」

上村は祥太郎の顔を覗き込む。

祥太郎は、上村の目を見て一瞬黙り込んだ後、

「……相手が、なあ」

そう言って、野球帽で顔を隠した。

新幹線と地下鉄を乗り継いで、真夏の日差しの中私は甲子園球場の目の前までやってきた。

私は、本格的な野球の球場に入ったことが無い。だから、このスケールの大きさは信じられないくらいに壮大で、私は思わず息を呑んだ。

「祥太郎……」

勝って欲しいと、心の底から願う。他の何を差し置いてでも。

『さあ、いよいよ始まります全国高等学校野球選手権大会、決勝戦！』

お母さんが、野球の分からない私にと持たせてくれた携帯ラジオ。その音声が右耳のイヤホンから流れてきて、私は慌てて球場内へと入った。

「ハッ、ハッ」

何度も階段を上がったり下がったりして、私は内野スタンドに出た。

『ストライーク、バッターアウト！！ 一回の裏、清陵高校四番岸村は三振に倒れました！』

「！」

私は、大歓声の中を駆け足でベンチに戻る敵チームのピッチャーを目にした。

『名宝実業の絶対的エース雛野、清陵岸村を全く寄せ付けませんでした！』

雛野というピッチャーに寄せられる大歓声が、彼の凄さを物語っていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5416g/>

花言葉を決める少女

2010年10月11日02時40分発行